

はじめに

2018年秋、父が他界しました。その1年半前、父から咳が続くという相談を受けたのが事の始まりでした。高血圧症を患っていた父は自宅から近い医院に毎月定期受診をしていたので、次回診察時に咳の症状について相談してみても？ と提案しました。その数週間後の検査では胸の音もレントゲンもとくに異状はなかったと私に連絡があり、咳止め薬を追加処方されて経過を見ることで一段落しました。年のせいなのか？ 風邪なのか？ ぐらいの感覚で深刻には考えておらず、診察後は父本人も安心した様子ではありました。それから数カ月後に再び連絡があり、今度は痰に血が混ざっているという不安な相談でした。私からは次回の受診日を待たずに早めに診てもらおうよう勧告しました。

父はすぐにいつもの医院に行ったものの、これ以上のことはわからないので公立病院を紹介され、そこで精密検査を受けました。大がかりな精密検査が1カ月以上も続き、最終的に家族に伝えられた診断結果が『肺がん』でした。肺がんの中でも非常にまれな種類で、肺がん全体の約0・5%しかない希少がんです。発見時にはすでにステージⅢで治療方法も限られており、しかも当時父はがん保険に先進医療特約を付けていたものの治療対象外であったため、結局放射線治療をしながら経過を見守ることしかできなかったのです。

治療中のある日、父がインターネットで免疫にまつわる高額な健康食品のパンフレットを取り寄せて私に相談をしてきました。がんに効くという根拠のない健康食品を提案されても否定するしかありません。何度も父から同じような相談を受けては否定しつづける私は、いつの間にか父に対してではなく、父の思いを否定する自分自身に対してストレスを感じるようになりました。

がんの進行は非常に早く、日が経つにつれて免疫も落ちていきました。風邪をひき、合併症の心筋炎を発症、緊急手術をするも意識が戻らず、しばらく集中治療室から出られない日が続きました。なんとか一命をとりとめ退院しても、体調不良になっては入退院を繰り返す日々。そんなあるとき、闘病中にもかかわらず父が思いがけない行動に出ました。亡くなる数カ月前の出来事で、母に車椅子を押してもらいながら運転免許更新に向かったのです。何を考えているのかわからずモヤモヤしていましたが、母とふたりで話したときにその意味を知りました。希少がんで治療の術がなくなっても、父は生きることが諦めてなかったのです。その意思を知った私は、そのころから父の気持ちを優先して高額健康食品を否定せず、むしろ一緒に選んであげるようになりました。運転免許更新も車椅子で参加し死ぬ直前まで生きることを諦めなかった父も2018年秋、70歳という若さで他界しました。日々どれだけ

健康や身体に気を遣っていても、結局は肺がんで終わる父を見ていて、健康でいる意味はあるのか深く考えさせられました。

父の死、これが私自身のこれからの人生観や健康に対する向き合い方が大きく変わったターニングポイントです。